特集

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと3

「子どもに寄り添う」とは？

座談会

幼児保育・教育の世界で何気なく使っている言葉、「そんなのあたりまえ」「大事に決まってる」とされていることに足を止めて考えてみよう、という巻頭特集第3弾。

今回は「寄り添う」を取り上げます。「寄る辺ない」幼い子どもに「寄り添う」ということ、それは保育者の姿として当然必要だと普段思っていますが、それってただそばにいることなのでしょうか。保育の現場で長年子どもに「寄り添う」ことにこだわってこられた方々をお招きして座談会をしました。（編集委員会）

岩﨑禎子（学校法人 愛育学園理事長）
吉岡晶子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）
佐治由美子（お茶の水女子大学講師）

岩﨑禎子先生は、社会福祉法人・恩賜財団母子愛育会にある家庭指導グループのスタッフになられて以来、40年間を愛育養護学校（特別支援学校）と共に歩んでこられました。家庭指導グループとは、津守真先生が戦後、特別保育室の名称を改めて再開された通園施設で、特別に手助けを必要とする子どもの保育とその親の相談にあたってきました。また、幼稚部・小学部を有する愛育養護学校は、一九五五（昭和三十）年に東京都の認可を受け先駆的な学校の一つとして歩んできたのですが、一九七九（昭和五四）年の「養護学校義務制」の施行によって全国に公立養護学校が増えていく中、私学としての愛育は在籍者数激減の事態を迎えました。が、先生方はその危機を、養護学校と家庭指導グループとを連携させることで乗り越えられました。そして、子どもの気持ちを大事に引き受けることを基本とし、子ども一人ひとりに必要な保育・教育をどのようにしていくかをみんなで考えていく、という家庭指導グループの方針は、そのまま養護学校に引き継がれていきました。その後、一九九九（平成十一）年三月には家庭指導グループを閉室とし、翌四月に愛育養護学校は、学校法人 愛育学園として新たな出発をしました。

以上のような学校の変遷についてのお話を、同席していた私どもは、最初に聴かせていただきました。ここからの座談会報告は、子どもに徹底して「寄り添う」岩﨑先生が語られた言葉を中心に、お伝えしていきたいと思います。

「つく」って何だろう

佐治　私は、短い期間ですが岩﨑先生と保育をご一緒させていただきました。その体験をこの機会に振り返ってみまして、以前、津守房江先生が「苗床のうた（愛育養護学校五十年史『あゆみ』二〇〇七年 所収）」と題して書かれた文章の中にある「はじめて家庭指導グループにいった日」という詩を、ここでご紹介させていただきたいと思いました。ここに用いられている「つく」という言葉、私も何度受け取っ

ていたことかしら、と思い出します。

はじめて家庭指導グループにいった日
「みつる君についてください」とスタッフ
『つく』って　何だろう
「お耳は聞こえないけれど　気持ちは通じます」
　でもどうしたらいいの
　当惑する私に並んで壁にもたれていたみつる君
「トン　トン　トン」みつる君の背中が壁を叩く
「トン　トン　トン」私も背中で壁を叩く
「トン　トン　トン」もう一回みつる君
「トン　トン　トン」もう一回私
みつる君がニヤッ笑って私の顔をのぞき込む
みつる君のご挨拶
ついているだけの私にお誘いのご挨拶

岩﨑　私、「一緒に遊んでください」となぜ言わないのかしらって、この詩を読んだ時に気付いたの。大人としての自覚をもちながら一緒にいるという意味で、この「つく」という言葉を使っていたと思う。遊ぶと言うと、時々、子どもの遊びを発展させることを考えてしまい、客観的じゃなくなってしまう内容があるのかなって思う。今日一日、このお子さんはあなたに預けますから、一日頑張ってくっついて見失わないようにして、という意味も含まれていると思う。どうして遊びという言葉に変えられなかったのか、自分でもよくわからないけれど、この詩を読んで、私は「つく」という言葉を意識するようになった。でも、「つく」なんて言葉、わからない人もいるでしょ。

佐治　普段あまり使わない言葉かもしれませんね。私も愛育で初めて聞いたような気がします。

岩﨑　使います？　幼稚園では？

吉岡　あまり使いませんね。

岩﨑　一般的には何ておっしゃいます？　一対一で一緒に遊ぶチャンスっていうのはあります？　実習生にお願いする場合とか。

吉岡　実習生には、相手をする子どもをあえて特定はしないです。

岩﨑　ちょっとそこは状況が違うかもしれませんね。

吉岡　ただ、結果として、実習生に、今日あなたは○○ちゃんについていたみたいだけど、というような言い方をすることはあります。ついて歩くという時には、子どもたちのほうが一歩前にいる感じがしますね。横にいるとか。

佐治　それは、子どものやることについていくって感じでしょうかね。子どもが何をしようとしているのかなって子どもに即してこちらも動きながら見ていくという状況が、今のお話からはイメージされます。即するの「即」の漢字も、「つく」と読むことができたような気がするのですが。

岩﨑　私たちは、初めて来た人に「子どもについてください」って言う時に、それ以外のことはあまり言わないのよね。こうしてくださいとか、何をやっちゃいけないとかもほとんど言ったことないし、あなたがいいと思うことをやってくださいって。ただ、今日の相手はこのお子さんですよっていう説明はします。自分で動けて、身体的に危険が起こらないお子さんの場合はお任せできるので、「ついてください」って言っていましたね。

佐治　お任せされた中で、子どもとの間にいろいろな事が起こりますよね。その時に、その判断が任される。その間に起こる事の責任を今日一日あなたに、という感じで。そうなった時に、子どもとの間でやった事は誰からか指示されたのではなく自分で考えてやったということで、その人自身がそれを引き受けることになる。もちろん困ったらいつでも聞くこともできるのですが、そこで私たちに寄せられる信頼というものに、大いに奮い立たせられました。実習生であるにもかかわらず、あなたの保育をその時空間でつくっていってくださいっていうふうに任されることは、とても大きかったですね。

子どもの気持ちを引き受ける

佐治　次にご紹介するのが、同じく津守房江先生の「衝撃音」という詩です。ここには、つくという言葉と寄り添うという言葉が、このように同じ場面に

関して使われています。幼稚園ではこのような展開になることはあまりないと思うのですが、吉岡先生はどのように読まれるのか、伺ってみたいです。

衝撃音

たかし君が奥の食器だなに片足をかけてお茶碗を落としたらしい
窓の外の半地下のコンクリートにぶつかるお茶碗の音が続く
担任の先生がぴったりついているから大丈夫
扉の外から　早く終わらないかと思っている私
「割りたいならいいよ」とより添った担任の先生の小さな声
この場が収まることばかりを思っていた私との違いに
「どきっ」
ものを割らずにいられないこの子の状況を担任の先生が一人で受けていた
次の保育の日　担任の先生が新しいお茶碗を買ってきてくれた
たかし君はもうお茶碗を割らなかった
……略……

（傍線は編集部）

吉岡　そうですね。幼稚園では、お茶碗は割りたいだけ割っていいというところまでは難しいかもしれません。でも、何か吐き出したくなっているその子の気持ちは、こちらが引き受けたいと思います。そういう時どうするかしらね。幼稚園の場合、他の子どもたちもよく見ているでしょうから。

岩﨑　特にこういう場面はね。

吉岡　そうなんです。周りの子どもたちは見ていると思います。最初はいけないことだと思っても、そのうちに、自分でコントロールがきかなくてやっているというその子の気持ちが、周りの子に伝わったりするんです。本当に、今あの子大変なんだなっていう感じかしら。こちらも、やってしまったことの裏にあるその子の気持ちに気付いてほしいと思うのです。そう思ってかかわっていると、周りの子が気持ちをわかってくれたという経験が、以前にありました。

岩﨑　それは、吉岡さんの心のあり方がちゃんと子どもたちに伝わっている。そこを、危ないという否

定的な気持ちで対応なされば、周りの子どもたちも、だめじゃないか、みたいになる。だから大人のあり方や大人の気持ちと同じような反応に、子どもはなっていきますよね。私は「あらあら」です。岩﨑さんは何でも「あらあら」で片づけるって言われたことあるけど。だって、言いようがないじゃない。部屋中が大洪水になっても、「あらあら」って。

吉岡　幼稚園でも、ありました。大洪水で思い出したんですけど。水道の栓をひねって最初はじゃあじゃあ流していましたが、そのうちに物に当たるとはねることが面白くなって、ごみ箱のくるくる回るフタに命中させちゃったんです。そしたら半円を描くようにシャアーッと水が飛んでしまいました。部屋の中が見事に洪水になった時には私も何も言えず、それこそあらあら状態で、必死で足拭きマットを持ってきて拭きだしました。やっぱり何人もやって来て、皆で拭きだしたということがありました。その時、やっちゃった人は、部屋の入り口で呆然となってずっと見ているんです。あの時も誰もその子に対しては言わずに、ただ後始末をしていました。だんだん後始末が楽しくなっちゃうんですけど。

▲岩﨑禎子氏

岩﨑　それが子どもなのよね。やった子も洪水にすることが目的ではない。大人から見ると、科学的な興味の広げ方をしていたということなんですよね。

吉岡　あれは、絶対面白いって。

岩﨑　そういう子どもの行為を、大人がいかに批判的ではなく受容的に受け止めながらやるかっていうことは、子どものこれからのものの見方とか人に対する心のもち方に大きく影響してきますよね。現場では、事実は事実としてあら大変、というのはあっていいと思う。感情だから。もうこうなっちゃった

▲吉岡晶子氏

ら拭くしかない。先生が批判的でなければ、子どもたちはその世界に入りやすいわけです。子どもって割合に心が大きいと思う。大人が否定的なことを言わなければ、その事態を引き受けていくのよ。

佐治　「あらあら」っていうのは、大人が批判的に用いる場合があるかもしれないけれど、実は子どもの気持ちが切り替わり、場面が展開しやすくなる言葉でもあるということですよね。岩崎先生は、『あらあら』しか「言いようがない」っておっしゃいました。また、吉岡先生からも、「あらあら」っていう言葉を幼稚園の観察の中で伺ったことがあるような気がします。「あらあら」と言いながら子どもの気持ちを引き受けていくことができれば、子どもたちがしなやかに場面展開に入ることのできるということを、お二人のそれぞれの保育場面から感じることがあります。

岩崎　私たちはとにかく人格を育てることが基本です。何かができるようになるとか、能力を高めるとかを第一目的としていませんね。やっぱり人格を、その子の特徴を、その子らしく生きられるように育てることが役割だと思っているの。その子のもっているものがちゃんと出せて、自信をもって生きられることです。たとえば、ある子どもが、繰り返し繰り返し水遊びをやっていたりする。六年生までそういうことやっていると、いつも裸の子、と言われることもあります。それで、お母さんに困ると言われ言い合いになることもある。もう先生着せてくださいって、こっちも着せているのよって。着せて五分くらい待って行ってみると、また脱いじゃっているの。ちょうどお迎えのころ裸になっていることもある。先生はまた裸にしているって。でも、学校で気持ちよく裸になれなくって外で裸になったら困るでしょ、ってお母さんに言うの。だから、そうしたい時に愛育で認められて、子どもが自分の気持ちや考えを受け止められたと思ってくれれば、そのことは生きる上での自信にもつながっていくという話もします。そこで、お家ではどうですかって聞いたら、裸ですって。それで、お母さんと大笑いになったの。愛育も、家と同じなのよって。リラックスできる場

であるということだから。許されているっていう、それだけで、子どもはうれしいんですよ。でも、そういうふうにして卒業して、その後どうするかなと思っていると、中学に入って初日から運動靴履いて裸にはもちろんならなくて、入学式は三十分や一時間、椅子に座っていたっていうの。そういう人が多いです。子どもはぱっと切り替える。それは、想像以上です。お母さんは喜んでいました。子どものほうがちゃんと場所をわきまえ状況を理解して、愛育では自由にできたけれどそうじゃない場があるんだということを考えることができる。私も、とってもうれしいです。

佐治　そうなるようにって方向付けていないのに、子どもについた結果がそれであるっていうことですね。育っていくんですよね、子ども自身が。そこに即して、そうよね、そうかしらねって一緒にやっていけば、子ども自身がそのように育っていく、ということですね。

吉岡　子どもも育ちたいんですよね。

「寄り添う」こととしつけの関係

佐治　子どもに寄り添う保育の中で、「しつけ」をどのように位置付けるかというようなことを尋ねられることが多いと思うのですが、岩﨑先生はどのように考えていらっしゃるでしょうか。

岩﨑　本当に必要なことって、自然に出てくると思う。その子にとって理解のできる言葉を使って危ないことを知らせることとか。知らせてもやりたがるんだったら、見守りながら危険のないようにやるっていうこともしますよね。やめさせるわけじゃなくてね。伝えることは大人としての役割だと思うのね。自由だからといって、見て見ぬふりはしたくない。じゃないと、その子は危険も何も感知しないまま危険なことを平気でやってしまう。

佐治　その後、怪我をしちゃったりしますよね。

▲佐治由美子氏

岩﨑　そうなの。その結果、大変なことになって周りから批判的な目で見られることもある。そうすると、子どもは自信をなくしちゃうでしょ。そこに至らないようにしてあげたいなと思うのね。だから、私は子どもに必要なことはちゃんと言います。たとえば、物の取り合いがあって、取られた子は泣いちゃうことがありますよね。ちゃんとその状況は説明する。そうすると取っちゃった子はじーっと聞いているけれど、だから返しなさいってことまでは言わないようにしているの。どうするかは、もうその子が決めることだし。ただ泣いている事実は、きちんと言います。でも、だいたい皆、返しに行きますね、偉いなあと思うんだけど。あと、いつの間にかぽんっと置く子もいますね。私がその子の代わりに、「じゃあ返してくるわね」ってやることもあるけれど。そんなふうに、その子にとって傷付くような言葉は使わないように心掛けながら、大人として気付いたことを子どもに伝えることでしつけをしている、と私は考えています。

佐治　たとえば絵本など、子どもが返せなくてその場に置いた時に代わりに返してあげるということですけれど、子どもに、置いたままその場を離れるのではなくて「ちゃんと返してあげましょうね」って、伝える大人も結構多いと思うのですが。

岩﨑　大きくなると、それをやってもいいような気がします。いろんな体験を踏んでそこに至っているのだったらね。愛育ではだいたい五、六年生になったら、「あなたが見終わってからでいいから持っていってあげてね」って言うこともありますね。

吉岡　あなたがしたことはあなただけのことじゃないのよ、っていうことを伝えるんですね。

岩﨑　そう、影響し合っていることをね。

吉岡　先生がおっしゃった「自信を失わないように伝える」という言葉から、私は、結局この人たちもこれから自分で考えて判断していかないといけない……、やっぱりその場で具体的に伝えていくことが大事なんだなあ、と思いました。

保育は楽しく生き合っていくこと

岩﨑　保育って楽しく生き合っていくことだと思う。子どもと共感するという、そこのベースがきちんと大人の中にあればね。何か教えないといけないのではなくて、すでにそこでやっていることの中で、子ども自身が学んでいく。そして、いちいち教えなくても、いろいろなことが子どもにちゃんと伝わっていくのだと思う。

佐治　そこに大人が立ち会っているっていう感じが、そのまま子どもの学びを支えているというか。だから、「寄り添う」という時に、子どもに何かが育つように大人が力を貸すとかいうことより、一緒に居させてもらえて幸せとかうれしいとかそういう気持ちのほうがずっと意味をもつような気がします。

岩﨑　そう、お互いにね、楽しい時間を過ごしていくのが保育よね。その楽しく共有した時間っていうのは、子どもにとっても大人にとっても、成長の時。お互いに成長し合う場面でもありますよね。

佐治　寄り添っている時って、すべてがその大人に任されている。そこにその人の思いがどこまで入っているかでやるべきことが決まってくるんですものね。そこには、集中力もすごく求められます。

岩﨑　そう、しかも予想しない場面が多いですよね。突然やってくるそれを、どうやってその子の心に寄り添い、共感し合いながらその子を引き受けていくのか。その子のそういう行為にいかに関心をぐっと集中させて、大人の気持ちを寄せていくか、ということですね。

佐治　そのあたりを考えると、震災の支援ボランティアで現地に入られている方々のことが浮かんできます。津波の被害に遭われた方と向き合って自分に一体何ができるのかと、「寄り添う」ことの難しさ、そしてその大切さを、体験されているように思います。保育の世界で大事にされてきたことが、今こうして社会的な広がりの中に置かれているということなのかもしれませんね。今日はありがとうございました。（二〇一一年五月二三日　構成・佐治由美子）